

茅野 徹郎 CHINO, Tetsuo

57年社会科学科卒（1期）

私の今までの人生で自から選択し、その通りに実現し嬉しい結果になったのは数少ないのですが、ICU 入学がその一つです。しかし入ったのは大学が認可される前の「語学研修所」(LANGUAGE INSTITUTE) という教育機関でした。

相当厳しいテストで入学した 75名の学友の大多数は大学入学希望でしたが設立が遅れたためやむを得ず研修所に入り、そこで一年間フレッシュマン・イングリッシュとエンリッチメント・コース(一般教養科目)を学びました。幸いだったのは、研修所の単位が大学で認められシニアの年には殆ど科目を取らず卒論とアルバイトに専念できたことでした。

献学時代それも始めから五年間 ICU にいた我々は、1949年に御殿場で北米・日本の有識者が集まり議論し宣言した、ICU 献学の理念が如何に三鷹の土地にインプリメントされていったかを毎日目の当たりにして過ごしました。それと同時に理念実現を情熱的に一生懸命おやりになっていた、ジャパニーズ、ノンジャパニーズの先生方、職員と共に学生として全く新しい大学づくりに参画出来たことは幸いだったと思っています。

そのような背景から我々は自分たちを PIONEERS と自負して呼んでいます。その思いを込めて研修所卒業五十周年である 2002年にはキャンパスの一隅(同窓会館の前の銀杏の脇)に THE PIONEER STONE という記念碑の大石を据えました。

私が自動車メーカーに勤めた 1960年頃の日本経済は、1964年の東京オリンピックを前に戦後復興から立ち直り発展途上の時期でした。原材料や石油を輸入に頼らざるを得ない日本にとって、当時外貨獲得は至上命題であり輸出にドライブがかかっておりました。企業サイドから英語がうまいだろうと期待された我々初期卒業生は、当時の企業が時流にのって、便利屋的な意味で採用したのではないかと多少疑っていました。

しかし、企業が採用した ICU の卒業生を見直したのは単に英語だけでなく、一般教養で裏うちされた知識、考え方、そして異文化接触のあり方でした。私は 1964年にベルギー駐在を皮切りにホンダの海外戦略の一端を担い 17年間駐在生活をしました。異文化との間には「差ではなく違いがあるだけである」という基本的な相互価値観理解は ICU キャンパスにおいて(特に寮生活で)カルチャーショックを伴いながら体得されたものでした。

ホンダの経営哲学は「需要のあるところで生産する」というもので、既に 1963 年にはベルギーにオートバイ工場を設立して現地生産始めていました。そこで
の製品を販売すべく私は ICU で培われたパイオニア精神を発揮することにより、
ヨーロッパにおいて未知の市場開拓を行ってきました。1980 年代のアメリカに
おける自動車摩擦問題も、ホンダが日本メーカーとして最初に乗用車を現地生
産するという決断をすることにより解決をはかり、その後日本の他社が追従し
て、バッシングが弱まりました。

リタイア後は、(社)日米協会専務理事、(公益財団法人)東京 YMCA
理事長、(公益財団法人)キープ協会理事長等、微力ながら社会貢献の役割も果
たしてきたつもりです。母校 ICU では総務理事、財務理事として、とくに財政
健全化に努力しました。

今回 DAY の栄えある賞を戴くとのお知らせをうけた時、私がこのような賞に
値するか悩みましたが、ICU におけるパイオニアとして、同窓生の皆さんに私
が見聞・体験した献学時の歴史を伝える「語り部」の一人としてお受けしよ
うと思うにいたりました。考えてみますと、我々が ICU に入った時、影も形もな
かったが、今厳然と存在するのは同窓会です。同窓会による強力な大学へのサ
ポートこそ ICU 発展の要ではないかと確信しています。

森枝 卓士 MORIEDA, Takashi

78年 社会科学科卒業 (22期)

自慢にもなんにもなりません、**「表彰」**されたりすることとは無縁な人生をおくってきました。旅をしては写真を撮ったり、文章を書いたり、あるいは旅で覚えた料理を作ったり、漫画のネタをだしたり、大学で教えたり。

器用とか多才に見えるかもしれませんが、要は中途半端なのでしょう。何をやっても。アメリカの食文化の大家、**James Beard** の名を冠した賞、あるいは日本の写真界の大御所であった、土門拳の賞など思い返すと、ノミネートされたことはあっても、もらったことはないんです。そういえば、小学校の頃から、絵も習字も夏休みの自由研究も……。

そんなわたしに、よりによって大学、同窓会からお誉めをいただくなんて、と特別な想いがあります。やっと卒業できた、劣等生なのに。

そもそも、九州の片田舎の少年には縁遠い大学でありました。知りませんでした。高校生の時、出会ってしまったアメリカの大写真家、ユージン・スミスの夫人、アイリーンにそういう大学があると教えてもらうまでは（彼女は近所のアメリカンスクールだったのです）。地元の教会の神父さんも「こんな田舎から受かる大学じゃありません」と自信を持っていつてくれたのですが、受験のために上京して、このキャンパスを見て、それから早稲田など他の大学を見てしまったら……。

何かの間違いで入れてもらい、アルバイトをしては外国に行き、写真を撮るという日々を過ごし、また、何かの間違いで四年で卒業させてもらい、以来、何が本業がわからぬ仕事をやってきたという次第です。駆け出しの自称フォトジャーナリストという時代、カンボジアの内戦を取材して（ICUの先輩で今は亡き馬淵直城さん（15期）の助手などしながら……）、「偉そうに国際政治がどうこうと言いながら、この国の人たちが何を食べているのかも知らない」と思い、そのような基本的な暮らしのレベルでの理解、認識が大事なのではないかと、「食文化」という視点からものを見る、考えるようになったのですが。

その中で多くの先輩後輩と出会い、あるいは他のあちこちの大学で教えたりで関わったりして改めて思うことが、少なくともわたしの人生にとっては、この大学は正解だったのだろうな、ということです。出会った様々なバックグラウンドの友人たち、先生たち、英語の教育もそうですけど、何より、教養学部の広く学べるシステム。開架式の図書館。そして、人口密度が低く、緑豊かなキャンパス。その中で四年間を過ごすことができたことが、その後の人生に大きな財産、ベースになっていたのだと改めて思います。

そうそう。特にわたしがICUで学んだと思うことが、「物事は相対的に見ること。文化の比較や歴史的な視点」です。ジャーナリズムや食の文化を大学などで教える立場になって、そのことを若い学生たちに繰り返し伝えていきます。特に、この愚かさが支配している時代だからこそ。日本語のメディアだけでは心許ない時代だからこそ。ICUの存在意義を改めて実感し、ここで過ごした日々感謝しています。

堀内 佳美 HORIUCHI, Yoshimi

07 年語学科卒 (51 期)

人生には何度か転機が訪れるものだと思いますが、私にとって ICU 入学がその一つです。小学部からずっと育った盲学校では、教科書やプリントはすべて点字で配布され、宿題も点字で提出できたのが、大学に入った途端にもものすごい量の資料の点訳やスキャンを自分で依頼し、取りまとめしなければなりません。そんな中で、入学前から絶対に参加したかったタイ・ワークキャンプで初めてのタイを経験し、3年生でバンコクに留学する中で、徐々に学んでいったことは、周りに頼ることの大切さです。その代わりに、自分には何ができるのか、周りにどうやってお返しをしていけばいいのか、ということを実験的に考えるサイクルができていきました。

もう一つ、critical thinking という新しいコンセプトは、田舎育ちで、先生や教科書は基本的に正しいものと教えられてきた私には大きな衝撃でした。1年生の英語のクラスが始まったばかりのころに、「大学はお金の無駄か」という趣旨の論文が出され、それについて議論する授業があり、私はこれから全く違う視点で学問に取り組むことになるんだな一と感じたのを今でも鮮明に覚えています。

持続可能な mutual assistance と、すべての物事に対する critical thinking という二つは、私が大学を卒業してから、プライベートでも仕事の上でも、年を追って重要性を増してくるように思います。ICU からいただいて、一生だれにも取り上げられる心配のない、大切な大切な財産です。

今はタイで読書の楽しみを老若男女に伝え、本や図書館を通してコミュニティをつなぐという取組をしています。ICU に入る前から憧れていた国際協力の分野に、草の根レベルの現地 NGO として一端を担うことができ、問題は山積しているものの、充実した日々を送っております。

とはいえ、私たちの図書館はとても小さなもので、活動年数もまだ6年にしかありません。DAY 賞を、とのお話しをいただいたときは、正直戸惑う気持ちの方が強かったのですが、日々限られた環境の中で読書と読み書き能力の推進・向上に取り組んでくれている7名の現地スタッフと、私たちにつながるすべてのタイの人たちを代表し、お受けしようと思いました。

よく、「行動力がある」と言っていたのですが、本当はあまり計画性のない性格の裏返しなのです。「障害を乗り越えて」とおっしゃる方も少なくないのですが、視覚障害がなければこの日を迎えることは100%なかったと確信しています。今後も、ポジティブな方にバイアスをかけつつも多角的にタイの読書事情をとらえ、多くの人に支えていただきながら、本と人、人と社会をつなげる仕事を続けていく所存です。